Shinshu University Journal of Educational Research and Practice, *No.12*, pp. 75-90, 2018
信州大学教育学部研究論集　第12号　pp. 75-90　2018年

＜研究報告＞

中・高等学校教員養成課程における学生のニーズ分析
―中・高等学校教員養成課程外国語（英語）コア・カリキュラムの点から―

内野駿介　帝京科学大学非常勤
酒井英樹　信州大学学術研究院教育学系

キーワード：教員養成，英語科教育法，外国語（英語）コア・カリキュラム

１．はじめに

本調査の目的は，中・高等学校教員養成課程外国語（英語）コア・カリキュラム（東京学芸大学, 2017）で提案されている到達目標と英語力の点から，教員養成課程における中・高等学校教諭免許状（英語）の取得を希望する大学生が，大学における教員養成段階にどの程度の学習が必要なのかというニーズを明らかにすることである[1]。

２．先行研究

東京学芸大学では，文部科学省委託事業である「英語教員の英語力・指導力強化のための調査研究事業」を平成 27 年度と平成 28 年度に実施した。この中で，教職課程を有する大学への質問紙調査，教育委員会を対象とした質問紙調査，有識者への聞き取り調査，海外視察調査などの結果に基づいて，平成 28 年度の報告書において小学校及び中・高等学校の教員養成・研修のコア・カリキュラムを提案している（東京学芸大学, 2017）。このコア・カリキュラムのうち，本調査に関係する中・高等学校教員養成課程外国語（英語）コア・カリキュラムにおいては，目標として次の 3 点が挙げられている[2]。

1. 「聞くこと」「読むこと」「話すこと（やり取り・発表）」「書くこと」の５つの領域にわたる生徒の総合的なコミュニケーション能力を育成するための授業の組み立て方及び指導・評価の基礎を身に付ける。
2. 生徒の理解の程度に応じて英語で授業ができる指導力を身に付ける。
3. 国際的な基準である CEFR B2 レベルの英語力を身に付ける。

（東京学芸大学, 2017, p. 78）

英語科の指導法（8 単位相当）に関する科目において 目標 1 の達成をねらい，英語科に関する専門的事項（20 単位相当）において目標 2 と目標 3 の達成をねらうとされている[3]。さらに，コア・カリキュラムでは，学習内容が列挙され，それぞれ，一般目標，学習項目，到達目標が提案されている。例えば，英語科の指導法に関する科目に関しては，学習内容として，カリキュラム・シラバス，生徒の資質・能力を高める指導，授業づくり，学習評

価，第二言語習得の 5 項目が挙げられている。このうち，学習評価については，次に示すような一般目標，学習項目，到達目標が示されている。

> ○一般目標
> 中学校及び高等学校における年間を通した学習到達目標に基づく評価の在り方，観点別学習状況の評価に基づく各単元における評価規準の設定，さらに評価の総括の仕方について理解する。また，言語能力の測定と評価の方法にいても併せて理解する。特に，「話すこと（やり取り・発表）」及び「書くこと」については，「パフォーマンス評価」（生徒が実際に話したり書いたりする活動の過程や結果を評価する方法）について理解する。
>
> ○学習項目
> ①観点別学習状況の評価，評価規準の設定，評定への総括
> ②言語能力の測定と評価（パフォーマンス評価等を含む）
>
> ○到達目標
> 1) 観点別学習状況の評価とそれに基づく評価規準の設定や評定への総括について理解し，指導に生かすことができる。
> 2) 言語能力の測定と評価（パフォーマンス評価等を含む）について理解し，指導に生かすことができる。
>
> （東京学芸大学, 2017, p. 74）

このコア・カリキュラムの活用については,「これからの学校教育を担う教員の資質能力の向上について～学び合い, 高め合う教員育成コミュニティの構築に向けて～（答申）」（中央教育審議会, 2015）によれば,「養成・研修に必要なコアカリキュラム開発を行い，課程認定の際の審査や大学による教職課程の改善・充実の取組に活用できるようにする」［下線は筆者らによる］と述べられている [4]。この答申による指摘を参考にして，本研究は,「教職課程の改善充実」をねらいとして，教職科目の授業を履修し始めた大学生を対象に，コア・カリキュラムで学ぶことが必要であると指摘されている内容についてどの程度身に付けているのかという調査結果を報告するものである。

中・高等学校教諭免許状（英語）の取得を希望する大学生がどの程度英語教育の教職に必要な知識・技能を身に付けているかを報告している先行研究はほとんどない。伊藤・伊東・廣田・大和 (2004) は，国立大学の教育学部 1 年生 277 名と 2 年生 222 名を対象に，TOEIC Bridge 用の模擬試験（リスニング 50 問，リーディング 50 問）を実施した。その結果，1 年生は平均点が 70.39，標準偏差が 8.85 であり，2 年生は平均点が 70.19，標準偏差が 9.35 であった。この得点は TOEIC の 300 点代後半に相当すると伊藤らは推測している

(p. 10)。これは英語 4 技能試験情報サイト (2017) によれば，CEFR A2 レベルに相当する。この研究は，教育学部で学ぶ大学生の英語力を示したものであるが，中・高等学校教諭免許状（英語）の取得希望者に特化したものではない。

教員の英語力については，文部科学省による『平成 28 年度「英語教育実施状況調査」の結果について』(2017) の中においても言及されている。この調査においては，CEFR B2 レベル相当以上の外部試験の資格を有する教員及び B2 以上の英語力を有すると自己評価する教員の占める割合は，32.0%（中学校）と 62.2%（高等学校）であると報告されている。しかしながら，この報告は，中学校や高等学校で英語を教える教員全体の英語力に関するデータであり，初任者に限るものではなく，教員養成への示唆は限られるものと考えられる。

教員養成・ 教員研修のコア・カリキュラムは，冒頭で言及したように各種の調査結果に基づいて設計されているが，教員養成課程や教員研修における実証的な検証はまだ十分に行われていない。特に大学において教諭免許状を取得しようと希望する学生や教員研修を受講する現職教員の実態を把握し，コア・カリキュラムが提案する学習内容や到達目標が適切であるかを検証することは，コア・カリキュラムの実効性を検討する上で重要な課題である。本研究は中・高等学校教員養成課程における学生のニーズを明らかにすることを目的とし，「中・高等学校教員養成外国語（英語）コア・カリキュラム」で示された知識・能力について，学生がどの程度身に付いていると感じているかについて調査・分析を行った。

３．方法

3.1 調査対象者と調査文脈

国立大学教育学部において開設する『英語科指導法基礎』を平成 29 年度に受講した学生のうち，研究協力を承諾した 48 名（2 年生 29 名，3 年生 10 名，4 年生 8 名，科目等履修生 1 名）に対し，4 月に質問紙票調査を実施した。回答者のうち，英語教育コースに在籍するものは 15 名（2 年生 14 名，3 年生 1 名）であった。

この学部は，原則として小学校教諭免許状（1 種）と中学校教諭免許状（1 種）を取得することが卒業要件となっている。例えば, 英語教育コースならば, 小学校教諭免許状（1 種）と中学校教諭免許状（英語）（1 種）の取得が卒業要件である。各学年の定員は平成 27 年度入学者までは 280 人であり，平成 28 年度入学者より 240 人である。英語教育コースの定員は 16 名である。

1 年次は異なるキャンパスにおいて主として共通教育科目を履修する。1 年次に受講する教育学部の専門科目は，①教育臨床入門（2 単位：通年科目），②環境教育（2 単位：通年科目），③野外教育（1 単位），④社会基礎Ａ（2 単位，コース指定），⑤国語基礎Ａ（2 単位），⑥算数科指導法基礎Ａ（2 単位），⑦地域教育演習Ｉ（1 単位，選択），⑧特別支援教育総論（2 単位，選択）である。①から③は，基本的に 1 年次にすべての教育学部生が受

講することになっているが，④以降は，コース指定や選択科目となっており，学生によって受講状況は異なる。英語科については，2 年次から英語科の指導法に関する科目と教科に関する科目が開講されている。

英語科の指導法に関する科目として，5 科目を開講している。授業科目名，単位数，必修・選択の区別，想定される受講時期は次の通りである。受講時期は英語教育コースの学生を対象として設定しており，他コースの受講生については特に制限を設けていない。

英語科指導法基礎（2）	必修科目	2 年生前期
英語科授業学（2）	英語教育コース必修科目・その他選択科目	2 年生後期
英語科評価論（2）	英語教育コース必修科目・その他選択科目	3 年生前期
英語科指導法演習Ⅰ（2）	選択科目	3・4 年生前期
英語科指導法演習Ⅱ（2）	選択科目	3・4 年生後期

本調査を実施した『英語科指導法基礎』は，各教科の指導法に関する科目の必修科目として位置づけられており，概論を扱うことになっている。英語教育コースの学生以外には，受講時期を指定していないが，他の授業科目を受講する前に『英語科指導法基礎』を受講していることを推奨している。また，平成 28 年度より『英語科指導法基礎』の受講資格として，TOEIC（IP テスト含む） 600 点以上，TOEFL PBT 503 点/CBT 177 点/iBT 62 点以上，IELTS 5.0 以上，英検 2 級以上のいずれかを取得していることを求めている。本調査の対象者のうち，英語教育コースの中で 3 年生がいるが，受講資格を満たさなかったため 2 年次には受講できなかった学生である。

この授業を本調査対象とした理由の 1 つは，1 種免許状であろうと 2 種免許状であろうと英語の免許状を希望する学生は，必ず履修しなくてはならない単位であり，本教育学部における中学校・高等学校教諭免許状（英語）を取得する学生の実態を把握するために最も適切な授業であると考えたからである[5]。また，『英語科指導法基礎』を受講してから，他の科目を受講することを推奨しているため，英語教育の学習初期であると考えられたからである。第 2 の理由として，この授業は概論を扱う講義であるため，コア・カリキュラムの提案されている内容を網羅的に扱う必要があり，学生の実態に合わせて改善していきたいと考えたからである。第 3 の理由として，受講資格として外部試験により一定程度の英語力を保持していることを求めているが，コア・カリキュラムで提案されている英語力の点からこの条件が適切であるかを検討したいと考えたからである。

本質問紙票調査は，平成 29 年 4 月 17 日（3 回目の授業）の授業中に実施した。質問紙票調査の実施までに，オリエンテーション及び受講資格等確認（第 1 回），目標とコミュニケーション能力（第 2 回），学習指導要領（第 3 回）の内容を扱っていた。

3.2 質問紙票

質問は全て 5 件法で自己評価を問うもので，コア・カリキュラムの項目に関する質問 46

項目と，英語の技能の 5 つの領域（「聞くこと」「読むこと」「話すこと［やり取り］)」「話すこと［発表］」「書くこと」）の到達度に関する質問 36 項目であった（資料 A 参照)。コア・カリキュラムの項目に関する質問項目は中・高等学校教員養成課程外国語（英語）コア・カリキュラム（東京学芸大学, 2017）の到達目標を元に作成され，それぞれの項目において 1「全く当てはまらない」から 5「とても当てはまる」の 5 件法で回答を求めた。包括的な内容を含んでいる学習項目については内容を細分化して質問項目を作成したため，本研究における質問項目数とコア・カリキュラムにおける学習項目数は一致しない。英語の技能の到達度に関する質問項目は，『「外国語」等における小・中・高等学校を通じた国の指標形式の目標（イメージ）たたき台』（文部科学省, 2016）の文言に修正を加えて作成された。それぞれの領域において CEFR の Pre-A1 レベル相当から B2 レベル相当までの能力記述文を作成し，それぞれの項目において 1「できないと思う」から 5「できると思う」の 5 件法で回答を求めた。

3.3 英語力の指標

本研究の分析対象者のうち，39 名からは TOEIC の得点が得られた。

４．結果

4.1 コア・カリキュラムに関する項目

表 1 は，各項目の回答の平均値と標準偏差を示している。全 46 項目のうち平均値が最も高いのは Q9「英語の文法について理解している」で，平均値は 3.58 であった。母平均の推定の結果，母平均値が 3 よりも有意に大きいのはこの項目のみであった。次いで Q1「様々な話題について, 目的や場面, 状況等に応じて英語で書くことができる」($M = 3.21$)，Q19「多様な文化的背景を持った人々との交流を通して，文化の多様性及び異文化交流の意義について体験的に理解している」（$M = 3.02$）の順に平均値が高かった。標本平均値が 3 よりも大きいのは以上の 3 項目であった。反対に，ほとんどの項目の平均値は 3 よりも小さく，母平均の推定の結果，母平均値が 3 よりも有意に小さい項目は 39 項目あった。特に，最も平均値が低かったのは Q25「年間指導計画の立案の仕方について理解している」（$M = 1.57$）で，次いで Q27「生徒の言語能力の測定と評価の在り方について理解している」（$M = 1.75$）の平均値が低く，母平均の推定の結果，この 2 項目の母平均値は 2 よりも有意に小さかった。

表 1　コア・カリキュラムに関する項目の結果（$N = 48$）

	領域	M (SD)		領域	M (SD)		領域	M (SD)		領域	M (SD)
Q1	[英コ]	3.21 (0.91)	Q13	[生徒]	2.38 (0.97)	Q25	[カリ]	1.57 (0.76)	Q37	[SLA]	1.92 (1.00)
Q2	[英文]	2.31 (0.85)	Q14	[授業]	2.02 (0.97)	Q26	[カリ]	2.15 (1.06)	Q38	[生徒]	2.52 (1.22)
Q3	[カリ]	2.67 (1.09)	Q15	[評価]	1.87 (1.06)	Q27	[評価]	1.75 (0.83)	Q39	[カリ]	2.17 (0.99)
Q4	[カリ]	2.17 (0.94)	Q16	[英語]	2.46 (1.06)	Q28	[異コ]	2.42 (1.17)	Q40	[生徒]	2.15 (1.04)
Q5	[生徒]	2.44 (1.08)	Q17	[生徒]	2.02 (1.01)	Q29	[英文]	2.08 (1.11)	Q41	[生徒]	1.98 (0.97)
Q6	[英コ]	2.79 (1.02)	Q18	[授業]	1.77 (1.18)	Q30	[生徒]	2.21 (1.24)	Q42	[英コ]	2.79 (1.04)
Q7	[生徒]	2.19 (1.01)	Q19	[異コ]	3.02 (1.35)	Q31	[英コ]	2.63 (1.07)	Q43	[カリ]	2.04 (1.00)
Q8	[カリ]	1.85 (1.06)	Q20	[異コ]	2.69 (1.16)	Q32	[英コ]	2.88 (0.99)	Q44	[生徒]	2.06 (0.97)
Q9	[英語]	3.58 (0.84)	Q21	[評価]	1.88 (0.99)	Q33	[生徒]	2.13 (0.95)	Q45	[英語]	2.04 (1.04)
Q10	[生徒]	2.29 (0.91)	Q22	[英文]	2.21 (0.89)	Q34	[英コ]	2.65 (0.97)	Q46	[生徒]	2.08 (1.06)
Q11	[評価]	1.83 (0.92)	Q23	[生徒]	2.25 (1.11)	Q35	[カリ]	2.21 (1.21)			
Q12	[生徒]	2.42 (1.00)	Q24	[生徒]	2.27 (1.02)	Q36	[授業]	1.98 (1.27)			

注：「領域」欄は各質問項目がコア・カリキュラムのどの領域に対応しているかを示している。
[カリ]…カリキュラム／シラバス，[生徒]…生徒の資質・能力を高める指導，[授業]…授業づくり，[評価]…学習評価，[SLA]…第二言語習得，[英コ]…英語コミュニケーション，[英語]…英語学，[英文]…英語文学，[異コ]…異文化コミュニケーション

コア・カリキュラムの領域ごとに項目を整理し，平均値を算出したものを表 2 に示す。全体的に，最も平均値が高い領域は「英語コミュニケーション」（$M = 2.82$）であり，英語科に関する専門的事項の領域の平均値が概ね高いことがわかった。すなわち，英語力や英語に関する知識については平均値が高かったといえる。反対に英語科の指導法の領域は全て平均値が 2.50 を下回っており，特に「学習評価」（$M = 1.83$）や「授業づくり」（$M = 1.92$）に関する内容の平均値が低いことがわかった。

領域ごとに，特に平均値が低い項目に着目して見ていく。「カリキュラム／シラバス」には 8 項目あり，Q25「年間指導計画の立案の仕方について理解している」（$M = 1.57$）の平均値が最も低かった。他に Q8「単元計画の立案の仕方について理解している」（$M = 1.85$），Q43「５つの領域別の学習到達目標設定の在り方について理解している」（$M = 2.04$）の平均値が低く，学習到達目標の設定やそれを基にした単元計画，年間指導計画の立案の仕方については学生の自己評価が低いことが明らかになった。

表 2　コア・カリキュラムに関する項目の領域ごとの結果（$N = 48$）

英語科の指導法		英語科に関する専門的事項	
領域	*M* (*SD*)	領域	*M* (*SD*)
カリキュラム／シラバス　(8)	2.10 (1.06)	英語コミュニケーション　(6)	2.82 (1.02)
生徒の資質・能力を高める指導　(15)	2.23 (1.05)	英語学　(3)	2.69 (1.07)
授業づくり　(3)	1.92 (1.15)	英語文学　(3)	2.20 (0.96)
学習評価　(4)	1.83 (0.96)	異文化理解　(3)	2.71 (1.25)
第二言語習得　(1)	1.92 (1.00)		

注：領域欄の数値は，各領域に含まれる質問項目数を示す。

「生徒の資質・能力を高める指導」には 15 項目あり，Q41「英語で聞いた内容を他者に口頭で説明するなど，複数の領域を統合した言語活動の在り方について理解している」（$M = 1.98$），Q17「英語で発表することの指導の在り方について理解している」（$M = 2.02$）の順に平均値が低く，次期学習指導要領において重要視されている統合的な言語活動や話すこと（発表）の指導の仕方について学生の自己評価が低いことがわかった。一方で Q5「英語でやり取りをすることの指導の在り方について理解している」（$M = 2.44$）の平均値はこの領域においては比較的高く，同じ「話すこと」の指導法においても特に発表活動について重点的に扱う必要性が示唆された。

「授業づくり」には 3 項目あり，Q18「外国語（英語）科の学習指導案を作成することができる」（$M = 1.77$），Q36「学習指導案の作成の仕方について理解している」（$M = 1.98$），Q14「学習到達目標に基づく授業の組み立てについて理解している」（$M = 2.02$）の順に平均値が低かった。最も平均値の高い Q14 の平均値が 2.02 であることから，授業の組み立て方に関する内容の自己評価は概ね低いということができよう。なお，学習指導案の作成の仕方を知っていることと実際に作成できることの自己評価の平均値に差があるかを検証するため，Q14 と Q36 の回答を対応ありの t 検定で比較したところ，両者の間に有意な差は認められなかった（$t(47) = 0.28, p = .781$）。

「学習評価」には 4 項目あり，Q27「生徒の言語能力の測定と評価の在り方について理解している」（$M = 1.75$），Q11「パフォーマンス評価の在り方について理解している」（$M = 1.83$），Q15「観点別学習状況の評価に基づく評価規準の設定や評定への総括について理解している」（$M = 1.87$），Q21「観点別学習状況の評価の在り方について理解している」（$M = 1.88$）の順に低かった。全ての項目の平均値が 2 未満であり，生徒の学習評価の在り方（観点別評価・パフォーマンス評価・言語能力の測定と評価）については概ね自己評価が低いということが明らかになった。

「第二言語習得」に含まれる項目は 1 つのみで，Q37「第二言語習得理論と，英語教育におけるその活用について理解している」の平均値は 1.92 であった。この項目の平均値は全 46 項目中下から 8 番目であり，第二言語習得に関する内容の自己評価は相対的に見て

低いということができる。

「英語コミュニケーション」には 6 項目あり，全ての項目の標本平均値は 2.5 以上であった。最も平均値が高かった項目は Q1「様々な話題について，目的や場面，状況等に応じて英語で書くことができる」(M = 3.21) であったが，母平均の推定の結果は 3 よりも有意に大きくはなかった。一方，Q31「英語で聞いた内容を他者に口頭で説明するなど，複数の言語領域を統合した言語活動を遂行することができる」（M = 2.63），Q34「様々なジャンルの話題の英語を聞いて，目的に応じて情報や考え等を理解することができる」（M = 2.65）の 2 項目の母平均が 3 よりも有意に小さかった。すなわち,「英語コミュニケーション」の領域は，他の領域に比べると表 2 で示されるように高い平均値であったが，この領域内の項目を詳細に見てみると，５つの領域別の技能では聞くことの自己評価が特に低く，また技能統合的な活動の自己評価も低いことがわかった。

「英語学」には 3 項目あり，平均値が低い順に Q45「英語の歴史的変遷及び国際共通語としての英語の実態について理解している」（M = 2.04），Q16「英語の音声の仕組みについて理解している」（M = 2.46），Q9「英語の文法について理解している」（M = 3.58）で各項目の平均値にばらつきがあった。Q9 は，3.1 節の最初で述べたように，全項目中最も平均値が高かったが，一方で，英語史・歴史英語学や音声学などの項目については平均値が低かった。特に英語史・歴史英語学や国際共通語としての英語に関する内容は，その知識が中・高等学校教員として日々の授業に直接生かされることは多くないかもしれないが，英語教員の資質として習得しておくことが不可欠な内容である。この項目の内容について，英語学の科目における指導の充実が求められる。

「英語文学」には 3 項目あり，Q29「英語で書かれた代表的な文学について理解している」（M = 2.08），Q21「文学作品において使用されている様々な英語表現について理解している」（M = 2.21），Q2「文学作品で描かれている，英語が使われている国・地域の文化について理解している」（M = 2.31）の順に平均値が低かった。全ての項目の平均値が 2.5 よりも低く, 全体的に学生の自己評価は低いと言える。この領域の指導内容は文学的な内容，文化的な内容，英語の表現に関する内容など多岐にわたるため，特定の内容に偏らない指導によって学生が広く知識を身に付けることが望まれる。

「異文化理解」には 3 項目あり，Q28「英語が使われている国・地域の歴史・社会・文化について基本的な内容を理解している」（M = 2.42），Q20「世界の文化の多様性や異文化コミュニケーションの現状と課題を理解している」（M = 2.69），Q19「多様な文化的背景を持った人々との交流を通して，文化の多様性及び異文化交流の意義について体験的に理解している」（M = 3.02）の順に平均値が低かった。歴史・社会・文化に関する内容の自己評価が特に低く，この内容に関する指導の充実が求められる。

4. 2 英語の技能の到達度に関する項目

項目ごとに 4「ややできると思う」及び 5「できると思う」の回答の割合を表 3 に示す。

表 3　英語の技能の到達度に関する項目の結果（*N* = 48）

聞くこと	4	5	4+5	読むこと	4	5	4+5
Q47 [Pre-A1]	39.6	52.1	91.7	Q55 [Pre-A1]	41.7	50.0	91.7
Q48 [Pre-A1]	29.2	66.7	95.8				
Q49 [A1]	33.3	60.4	93.8	Q56 [A1]	27.1	64.6	91.7
Q50 [A1]	27.1	64.6	91.7	Q57 [A1]	25.0	68.8	93.8
Q51 [A2]	35.4	56.3	91.7	Q58 [A2]	29.2	62.5	91.7
Q52 [A2]	35.4	47.9	83.3	Q59 [A2]	33.3	56.3	89.6
Q53 [B1]	31.3	25.0	56.3	Q60 [B1]	35.4	27.1	62.5
Q54 [B2]	27.1	6.3	33.3	Q61 [B2]	33.3	12.5	45.8

話すこと［やり取り］	4	5	4+5	話すこと［発表］	4	5	4+5	書くこと	4	5	4+5
Q62 [Pre-A1]	29.2	64.6	93.8	Q69 [Pre-A1]	29.2	58.3	87.5	Q76 [Pre-A1]	22.9	68.8	91.7
Q63 [A1]	37.5	54.2	91.7	Q70 [A1]	31.3	54.2	85.4	Q77 [A1]	20.8	70.8	91.7
Q64 [A1]	37.5	52.1	89.6	Q71 [A1]	33.3	52.1	85.4	Q78 [A1]	20.8	66.7	87.5
Q65 [A2]	39.6	37.5	77.1	Q72 [A2]	43.8	33.3	77.1	Q79 [A2]	50.0	37.5	87.5
Q66 [A2]	52.1	33.3	85.4	Q73 [A2]	39.6	27.1	66.7	Q80 [A2]	45.8	33.3	79.2
Q67 [B1]	37.5	6.3	43.8	Q74 [B1]	27.1	6.3	33.3	Q81 [B1]	41.7	8.3	50.0
Q68 [B2]	6.3	2.1	8.3	Q75 [B2]	8.3	4.2	12.5	Q82 [B2]	22.9	0.0	22.9

注：少数第二位にて四捨五入して表記しているため，4 の欄と 5 の欄の合計が 4+5 の欄の数値と一致しない場合がある。

「聞くこと」では，Pre-A1 レベルと A1 レベルの項目において 90%以上の学生が 4 及び 5 と回答した。A2 レベルの項目においてもその割合は 80%以上で多くの学生が到達度を高く評価していたが，Q51「ゆっくりはっきりと話されれば，身近な事柄に関する短い説明の重要な情報を理解することができる」で 91.7%，Q52「身近な話題に関する短い会話を聞いて，だいたいの内容や重要な情報を理解することができる」で 83.3%と，同じレベルの能力記述文に対する評価でも割合に 10%弱の差があった。B1 レベルでは 4 及び 5 と回答した学生の割合が 56.3%，B2 レベルでは 33.3%であった。

「読むこと」においては，Pre-A1 レベル，A1 レベル，A2 レベルの項目においてほぼ 90%以上の学生が 4 及び 5 と回答した。また B1 レベルでは 62.5%，B2 レベルでは 45.8%であり，A2 より低いレベルと比較するとその割合は小さかった。

「話すこと［やり取り］」では，Pre-A1 レベルと A1 レベルの項目においてほぼ 90%以上の学生が 4 及び 5 と回答した。A2 レベルの項目では Q65「身近な話題について，簡単な英語を用いて簡単な意見交換をすることができる」で 77.1%，Q66「日常生活や自分に関連した事柄に関する短い簡単なやりとりをすることができる」で 85.4%と若干のばらつきがあったものの，四分の三以上の学生が高い到達度評価をしていた。一方 B1 レベルの項目ではその割合が半分未満（43.8%）であり，B2 レベルでは 8.3%であったことから，B1 レベル以上の項目に対して高い困難度を感じている学生が多くいることが推察される。

「話すこと［発表］」では，Pre-A1 レベルにおいても 4 及び 5 と回答した学生の割合が 90%に満たなかった。A1 レベルにおいてはそれぞれ 85.4%，A2 レベルにおいては Q72「身近な話題について，自分の意見やその理由を簡単に話すことができる」が 77.1%，Q73「身近な話題や関心のある事柄について，簡単な説明をすることができる」が 66.7%であり，A2 レベル以下の項目では他の領域と比べて高い到達度評価をしている学生の割合が小さいことがわかった。また，その割合は B1 レベルでは 33.3%，B2 レベルでは 12.5%であった。

「書くこと」では，Pre-A1 レベルと A1 レベルの項目においてほぼ 90%以上の学生が 4 及び 5 と回答した。A2 レベルの項目では項目間に若干のばらつきがあったものの概ね 80%以上の学生が，また B1 レベルでは 50.0%の学生が 4 及び 5 と回答した。B2 レベルの項目ではその割合は 22.3%であったが，5「できると思う」と回答した学生は 0 名であり，他の領域と比べて B2 レベルは難しいと感じている学生が多いことが考えられる。

コア・カリキュラムが B2 レベル相当の英語力を身に付けることを目標としていることを踏まえ，各領域の B2 レベルの結果を比較すると，「読むこと」「聞くこと」「書くこと」「話すこと［発表］」「話すこと［やり取り］」の順に 4 及び 5 と回答した学生の割合が大きかった（それぞれ 45.8%，33.3%，22.9%，12.5%，8.3%）。すなわち，受容能力においては B2 レベルであっても到達度評価が比較的高いが，産出能力，特に「話すこと」においては学生の困難度が高い傾向が示唆された。

4.3 英語力の指標

48 人中 39 人（81%）の学生から TOEIC の得点が得られた。この得点を『英語 4 技能試験情報サイト』の基準に則って CEFR のレベルに換算した。その結果，A2 レベルの人数が最も多く，20 人（42%）であった。続いて，B1 レベルの人数が多く，16 人（33%）であった。B2 レベルは 2 人（4%），A1 レベルは 1 人（2%）であった。多くの学生は A2 もしくは B1 レベルであり，コア・カリキュラムが目標としている B2 レベルに到達している学生は全体のわずか 4%であった。このことから，英語コミュニケーションの科目を中心として教育課程全体を通して学生の英語力を向上させる必要があることが示唆された。なお，学生の TOEIC 得点は自己申告によるものであり取得の時期も一定でないため，必ずしも調査時点での英語力を示しているわけではないことを付記しておく。

５．考察とまとめ

本調査の結果は，中・高等学校教諭免許状（英語）の取得を希望する大学生について以下の 3 点にまとめられる。

1. 指導法に関する内容については自己評価が低く，その内容を理解しているとは認識していない。
2. 英語力の自己評価については，受容能力（聞くことと読むこと）に比べて，産出能力（話すこと［やり取り］，話すこと［発表］，書くこと）の自己評価が低かった。また，B2 レベルについては，読むことについては 45.8%の学生が肯定的な自己評価（「ややできると思う」と「できると思う」）をしていたが，聞くこと，書くこと，話すこと［発表］，話すこと［やり取り］の順番で肯定的な回答が少なくなり，話すこと［やり取り］については 8.3%の学生しか肯定的な自己評価をしていなかった。
3. 英語力については，ほとんどの学生が A2 もしくは B1 レベルであり，コア・カリキュラムで提案している B2 に達している学生は 2 人（4%）しかいなかった。

これらの結果に基づくと，中学校・高等学校教諭免許状（英語）の取得を希望する学生は，英語教育に関する授業を受講するスタート地点では，コア・カリキュラムが提案する学習内容をほとんど理解しておらず，また到達目標を実現していないと言える。すなわち，本調査対象の中・高等学校教員養成課程における学生のニーズという点では，「中・高等学校教員養成外国語（英語）コア・カリキュラム」で示された知識・能力について，ほとんどすべての内容を教員養成において身に付ける必要があるということを示している。結果の 1 については，ほとんどの項目について，平均値が 3 を下回っていることから，英語の指導法に関する科目においては，シラバス作成を工夫し，コア・カリキュラムで提案されている学習内容を網羅的に含め，その到達目標を達成できるようにする必要がある。また，複数の指導法に関する科目が設定されている場合には，科目間の連携が必要である。結果の 2 と 3 については，大学における教員養成段階で，B2 レベル相当の英語力に達していなかったことから，これらの学生の英語力を向上させるための工夫が必要であり，特に受容能力に比べて産出能力の向上を目指す必要がある。話すこと［やり取り］については，肯定的な自己評価の割合がかなり少なく，対応が求められる技能であると考えられる。

本調査において，コア・カリキュラムで提案されている学習内容や英語力の点から，学生がどのようなことについて学んだり身に付けたりしなくてはならないのかというニーズを明らかにした。今後は，コア・カリキュラムで提案されている内容に基づいて授業改善を行い，その結果，学生の自己評価がどのように変わっていくかを検証するなど，コア・カリキュラムに基づいて授業改善を試み続けていきたい。

注

[1] 本稿は，第 47 回中部地区英語教育学会・長野大会（平成 29 年 6 月 25 日，於信州大学教育学部）で発表された「中・高等学校教員養成課程における学生のニーズ分析―中・高等学校教員養成課程外国語（英語）コア・カリキュラムの点から―」（内野駿介・酒井英樹）の内容を加筆修正したものである。

[2] 目標の 1 点目に 5 つの領域に言及がある。平成 29 年 3 月に告示された学習指導要領より，話すことが話すこと［やり取り］と話すこと［発表］に分割されて 5 領域となっている。

[3] 中・高等学校教員養成課程外国語（英語）コア・カリキュラムにおいては，教育職員免許法施行規則の一部が改正される予定であったことを考慮して，「英語科の指導法関する科目」と「英語科に関する専門的事項」という用語を採用している。改正される内容の一部に，「指導法に関する科目」と「教科に関する科目」とされていた従来の区分が「教科及び教科の指導法に関する科目」という科目名になり，この大くくり化された科目の中に「各教科の指導法に関する科目」と「教科に関する専門的事項」という事項が設定されるという改正がある。上記の用語は，この事項区分に基づいている。

[4] 「コアカリキュラム」と「コア・カリキュラム」の表記については，原典に従っている。なお，本稿では，東京学芸大学の文部科学省委託事業の報告書に従って，「コア・カリキュラム」という表記を採用している。

[5] このため，本調査対象者の中には，中・高等学校教諭免許状（英語）の 1 種免許状取得希望者と 2 種免許状取得希望者が混在している。

引用文献

中央教育審議会. (2015). 『これからの学校教育を担う教員の資質能力の向上について～学び合い，高め合う教員育成コミュニティの構築に向けて～（答申）』(平成 27 年 12 月 21 日）. Retrieved from http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1365665.htm

英語 4 技能試験情報サイト. (2017). 『資格・検定試験 CEFR との対照表』. Retrieved from http://4skills.jp/qualification/comparison_cefr.html.

伊藤徳一郎・伊東英・廣田則夫・大和隆介. (2004). 「岐阜大学教育学部生の英語力に関する研究 (1)」『岐阜大学教育学部研究報告　人文科学』53(1), 149-162.

文部科学省. (2016). 『外国語ワーキンググループにおける審議の取りまとめについて（報告）』. Retrieved from http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/058/sonota/1377056.htm

文部科学省. (2017). 『平成 28 年度「英語教育実施状況調査」の結果について』. Retrieved from http://www.mext.go.jp/a_menu/kokusai/gaikokugo/1384230.htm

東京学芸大学. (2017). 『文部科学省委託事業「英語教員の英語力・指導力強化のための調査研究事業」平成 28 年度報告書』 Retrieved from http://www.u-gakugei.ac.jp/~estudy/

資料 A. 質問項目一覧

＜コア・カリキュラムに関する質問項目＞

1. 様々な話題について、目的や場面、状況等に応じて英語で書くことができる。
2. 文学作品で描かれている、英語が使われている国・地域の文化について理解している。
3. 小・中・高等学校を通した英語教育の在り方の基本について理解している。
4. 中学校及び高等学校の外国語（英語）の学習指導要領について理解している。
5. 英語でやり取りすることの指導の在り方について理解している。
6. 様々な話題について、目的や場面、状況等に応じて英語で発表ができる。
7. ALT 等とのティーム・ティーチングによる指導の在り方について理解している。
8. 単元計画の立案の仕方について理解している。
9. 英語の文法について理解している。
10. 英語の音声的な特徴に関する指導の在り方について理解している。
11. パフォーマンス評価の在り方について理解している。
12. 英語の文法に関する指導の在り方について理解している。
13. 英語を読むことの指導の在り方について理解している。
14. 学習到達目標に基づく授業の組み立てについて理解している。
15. 観点別学習状況の評価に基づく評価規準の設定や評定への総括について理解している。
16. 英語の音声の仕組みについて理解している。
17. 英語で発表することの指導の在り方について理解している。
18. 外国語（英語）科の学習指導案を作成することができる。
19. 多様な文化的背景を持った人々との交流を通して、文化の多様性及び異文化交流の意義について体験的に理解している。
20. 世界の文化の多様性や異文化コミュニケーションの現状と課題を理解している。
21. 観点別学習状況の評価の在り方について理解している。
22. 文学作品において使用されている様々な英語表現について理解している。
23. 英語を聞くことの指導の在り方について理解している。
24. 英語の語彙・表現に関する指導の在り方について理解している。
25. 年間指導計画の立案の仕方について理解している。
26. 中学校及び高等学校の外国語（英語）の教科用図書（教科書）について理解している。
27. 生徒の言語能力の測定と評価の在り方について理解している。
28. 英語が使われている国・地域の歴史・社会・文化について基本的な内容を理解している。
29. 英語で書かれた代表的な文学について理解している。
30. 異文化理解に関する指導の在り方について理解している。
31. 英語で聞いた内容を他者に口頭で説明するなど、複数の言語領域を統合した言語活動を遂行することができる。

32. 様々な話題について、目的や場面、状況等に応じて英語でやり取りができる。
33. 生徒の特性・習熟度への対応について理解している。
34. 様々なジャンルや話題の英語を聞いて、目的に応じて情報や考えなどを理解することができる。
35. 次期学習指導要領の３つの資質・能力について理解している。
36. 学習指導案の作成の仕方について理解している。
37. 第二言語習得理論と、英語教育におけるその活用について理解している。
38. 教材及び ICT の活用の仕方について理解している。
39. 小学校の外国語活動・外国語の学習指導要領や教科用図書等の教材について理解している。
40. 英語を書くことの指導の在り方について理解している。
41. 英語で聞いた内容を他者に口頭で説明するなど、複数の領域を統合した言語活動の指導の在り方について理解している。
42. 様々なジャンルや話題の英語を読んで、目的に応じて情報や考えなどを理解することができる。
43. ５つの領域別の学習到達目標設定の在り方について理解している。
【注：５つの領域…聞くこと、読むこと、話すこと（やり取り）、話すこと（発表）、書くこと】
44. 英語でのインタラクションについて理解している。
45. 英語の歴史的変遷及び国際共通語としての英語の実態について理解している。
46. 英語の文字の指導の在り方について理解している。

コア・カリキュラムの各領域に対応する質問項目

コア・カリキュラムの領域	質問項目（番号は上述の一覧に対応）
＜英語科の指導法＞	
カリキュラム／シラバス	3, 4. 8, 25, 26, 35, 39, 43
生徒の資質・能力を高める指導	5, 7, 10, 12, 13, 17, 23, 24, 30, 33, 38, 40, 41, 44, 46
授業づくり	14, 18, 36
学習評価	11, 15, 21, 27
第二言語習得	37
＜外国語に関する専門的事項＞	
英語コミュニケーション	1, 6, 31, 32, 34, 42
英語学	9, 16, 45
英語文学	2, 22, 29
異文化理解	19, 20, 28

＜英語力の到達度の自己評価に関する質問項目＞

47. 英語のアルファベットの発音を聞いて、どの文字であるかわかる。
48. 挨拶や、短いとても簡単な指示を聞いて理解することができる。

49. 挨拶や簡単な指示を聞いて理解することができる。
50. ゆっくりはっきりと話されれば、身の回りの事柄に関する簡単でとても短い会話や説明を、イラストや写真などを参考にしながら理解することができる。
51. ゆっくりはっきりと話されれば、身近な事柄に関する短い説明の重要な情報を理解することができる。
52. 身近な話題に関する短い会話を聞いて、だいたいの内容や重要な情報を理解することができる。
53. 比較的ゆっくりはっきりと話されれば、時事問題や社会問題に関する短い簡単な説明を聞いて、重要な情報を理解することができる。
54. 自然な速さで話される時事問題や社会問題に関する長い説明を聞いて、だいたいの内容や重要な情報を理解できる。
55. 英語のアルファベットを見て、発音することができる。
56. 身の回りの事柄に関して簡単な英語で書かれたとても短い説明を読んで、イラストや写真を参考にしながら、だいたいの内容を理解することができる。
57. 簡単な英語で書かれたとても短い物語を読んで、イラストや写真などを参考にしながら、あらすじを理解することができる。
58. 身近な話題に関して簡単な英語で書かれた短い説明や手紙を読んで、だいたいの内容や重要な点を理解できる。
59. 簡単な英語で書かれた短い物語を読んで、あらすじを理解することができる。
60. 社会的な問題に関する短い会話や説明を読んで、だいたいの内容や重要な情報を理解できる。
61. 時事問題や社会問題に関する記事やレポート、資料を読んで、だいたいの内容や重要な情報を理解できる。
62. 相手がゆっくり話したり、繰り返したり、言い換えてくれれば、自分に関することについてとても簡単な質問に答えることができる。
63. 相手がゆっくり話したり、繰り返したり、言い換えてくれれば、とても身近な話題について、簡単な表現を使って質疑応答をすることができる。
64. 相手の英語が理解できない場合など、必要に応じて、聞き返したり意味を確認したりすることができる。
65. 身近な話題について、簡単な英語を用いて簡単な意見交換をすることができる。
66. 日常生活や自分に関連した事柄に関する短い簡単なやりとりをすることができる。
67. 身近な話題や興味関心のある事柄について、準備をしないで会話に参加することができる。
68. 幅広い話題に関する会話に参加し、情報や自分の意見などを適切かつ流暢に表現することができる。
69. 自分や身の回りの物事に関するとても限られたことについて、簡単な語句や文を用いて話すことができる。
70. とても身近な事柄や出来事について、事実、自分の考えや気持ちなどを、簡単な語句や文を用いて短く話すことができる。
71. 簡単な語句や文を用いて、自分について話すことができる。

72. 身近な話題について、自分の意見やその理由を簡単に話すことができる。
73. 身近な話題や関心のある事柄について、簡単な説明をすることができる。
74. 多様な考え方ができる時事問題や社会問題について、さまざまな見方の長所・短所を示すとともに、自分の意見を幅広い表現を用いて論理的に説明することができる。
75. 身近な話題や関心のある事柄について、まとまりのある内容を話すことができる。
76. 英語のアルファベットの大文字と小文字を書くことができる。
77. とても身近な事柄について、簡単な語句や文を用いて書くことができる。
78. 自分に関するとても限られた情報を、簡単な語句や文を用いて書くことができる。
79. 聞いたり読んだりした内容について、簡単な語句や表現を用いて、自分の意見や感想を書くことができる。
80. 身近な事柄について、簡単な語句や表現を用いて、短い説明文を書くことができる。
81. 関心のある分野のテーマについて、まとまりのある文章で具体的に説明するとともに、自分の意見やその理由を加えて書くことができる。
82. 時事問題や社会問題など幅広い話題について、得た情報を活用しながら、自分の意見やその理由を論理的に書くことができる。

各技能における CEFR レベルに対応する質問項目

英語の技能	CEFR レベル				
	Pre-A1	A1	A2	B1	B2
聞くこと	47, 48	49, 50	51, 52	53	54
読むこと	55	56, 57	58, 59	60	61
話すこと［やり取り］	62	63, 64	65, 66	67	68
話すこと［発表］	69	70, 71	72, 73	74	75
書くこと	76	77, 78	79, 80	81	82

注：番号は上述の一覧に対応

（2017年//月　/日　受付）
（2017年12月14日　受理）